

幼児の探索的な活動に関する研究

—こども園における手作り楽器のワークショップを事例として—

A Study concerning Exploratory Activities of Infants: Through the Workshop “Musical Instruments of Handmade” in a Childcare Center

黒宮 可織 (千葉女子専門学校)

鎌田 千佳 (千葉敬愛短期大学)

二見 美千代 (千葉敬愛短期大学)

KUROMIYA Kaori (Chiba Women Technical College)

KAMADA Chika (Chiba Keiai Junior College)

FUTAMI Michiyo (Chiba Keiai Junior College)

(要旨)

昨今、幼児が生活や遊びの中で身のまわりの音を感じることの重要性が示されている。本研究は、幼児の「音」に対する探索的な活動の可能性を見出すこと及び保育現場における音楽表現の実践の有効性を検証することを目的とし、5歳児を対象に手作り楽器のワークショップを実践した。実践の様子から子どもと音のかかわりに着目をし、観察及び分析をした結果、子どもは楽器をつくる過程及び楽器で音を出す過程を通して、探索的に音とかかわりをもっていることがわかった。さらに、手作り楽器を使ってイメージを音にする表現活動においては、幼児が全身を伴って表現している姿が見られた。探索的な活動は、幼児の主體的な音楽表現を育む保育実践であることを考察している。

(キーワード)

手作り楽器、音楽表現、探索的な活動、幼児、身体性

1. はじめに

子どもと音の関係は、両親の声をはじめ、外に出て聞こえる風の音、公園で拾った葉を手で掴んだ音、石同士をぶつけた音など、子どもが生活している環境、遊びの中の環境に存在している音を聞くことから始まる。

平成29年3月告示の幼稚園教育要領では、領域「表現」の内容の取扱いにおいて、「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」が新たに加えられた。

本研究では、領域「表現」のねらい及び内容を踏まえ、子どもが日常の中で感じる音に対して、探索的にかかわる活動の実践を示した。幼児期に、身のまわりの音に対し主體的に身体感覚をはたらかせること、音に探索的に向き合うことは、うたを歌うことや楽器を演奏する等の音楽的实践への有効的な架け橋となるのではないかと考える。

2. 「探索的」な活動の意義

幼児にとって「探索的」であるとは、どのようなことであろうか。

生態学的アプローチにおいて「探索行動」とは、

知覚情報を収集し、それらをより鮮明に抽出（分化）するための活動とされている（Adolph, & Kretch ; 2015）（三嶋・丸山 ; 2010）。それを受けて、丸山（2017）は、乳児と母親を対象とした楽器遊びの縦断的観察から、乳児の楽器に対する探索について考察をしている。子どもは最初から楽器（モノ）を「楽器」として捉えるのではなく、子ども自身の探索と母親との相互的な関わりの中で、楽器が音楽的な対象であることを見出していくことが示されている。つまり子どもにとって楽器を通じた探索とは「ただやみくもに試行錯誤を繰り返すことではなく、そのモノの可能性について〈より一層知ること〉をもたらす行動だった¹」としている。また、石川・村上（2017）は、2歳児における楽器へのアプローチについて実験的な観察をおこなっている。子どもの多様なアプローチの姿を捉えて、多様なかわりかたと探索を保障する環境及び、楽器選定の視点、音を介してのかかわりの重要性を述べている。

乳児期における楽器を通じた探索的活動の研究は、アフォーダンス²への関心の高まりもあり、それ相応になされていると考える。幼児期については、伊原（2018）、津田（2016, 2019）が、日常の保育における幼児の探索的な活動を観察し、幼児と楽器の出会いについて示唆を与えている。幼児期における楽器を通じた実践の先行研究を見ると、主に楽器を「楽器」として認識した保育実践、例えば器楽合奏などの音楽的な内容が多く、保育実践としての楽器を通じた探索的活動の研究は少ないといえよう。しかし、幼児であってもアフォーダンスの視点から、身体の総合的な感覚を伴って、モノから出る音、またモノを楽器にするという探索的側面に注目することは、意義のあることではないかと考える。

¹ 丸山（2017）「楽器への旅路、あるいは音への誘い—乳幼児期の音楽的発達とアフォーダンスの学習」、『音楽教育実践ジャーナル』第15巻、119頁。

² 「既存の用語では表現し得ない仕方」（ギブソン, J. J. 1985, p.137）で環境と行為する者との関係を表現するために作られたものである。

³ 元山形大学教育学部教授、日本オルフ研究会代表。

⁴ 谷中（2018）「手作り楽器によるアンサンブル活動の研究 — 創造性を育む音楽教育について—」、『音楽教育メディア研究』第4巻、47頁。

3. 「手作り楽器」について

3-1. 手作り楽器の定義

谷中（2018）は、手作り楽器を用いた活動は国内外を問わず、創造的な音楽教育の観点でおこなわれてきたが、国内で初めての実践者は星野圭朗³であると述べている。続けて谷中は、星野の言葉を要約しながら、手作り楽器の定義について「身近な材料を使って音の出るものを自作したものを『手作り楽器』という。⁴」としている。本研究は谷中の定義を踏襲し、楽器の定義を広く捉えたいと考える。また、「身近な材料」については幼児が日常の生活や遊びの中で触れることのできるものを対象とした。それは、幼児が手を伸ばせば取ることのできるもの、幼児が生活の中で目に留まるもの等、幼児の身のまわりに存在する自然の素材である。

3-2. 手作り楽器の教育実践

手作り楽器による実践の多くは、小学校における音楽科教育の授業展開の一つとして取り組まれている⁵。前掲の谷中優⁶氏も1970年代より小学校で実践を始めている。幼稚園・保育園・こども園等における実践は、近年、乳幼児の音環境に対する関心が高まったことや幼稚園教育要領の改訂に伴い注目されてきているといえる。

吉永（2018）は、領域「表現」に関する著の中で「手作り楽器の意義⁷」を述べている。身のまわりのものは「正しい音」や「正しい鳴らし方」を持たないがゆえに、子どもが自由に音を見つけて行く探求心をくすぐること、さらに自分の音を見つける過程において「聴く・感じる・考える・工夫する」というプロセスが窺えることが述べられている。

実践例については、長崎・馬場（2017）が領域「表現」における「音楽」と「造形」を融合した木

⁵ 論文閲覧サイト CiNii Articles 「手作り楽器」検索より <https://ci.nii.ac.jp/手作り楽器>（最終アクセス：令和2年2月7日）

⁶ 作曲家、元金沢星稜大学人間科学部教授「10分のできる！手作り楽器の作り方・遊び方アイデア集」（明治図書）著者。

⁷ 吉永早苗（2018）「子どもの豊かな感性と音楽表現」、『新訂事例で学ぶ保育内容〈領域〉表現』、萌文社、178頁。

を使った楽器作りと子どもによる演奏を実施し、その効果を検証している。実践後のアンケートから、活動は児童・幼児の表現に対する意欲を引き出す点で効果的であることを明らかにしている。この実践はノンフォーマルな場において幼児及び児童を対象に実施されたものである。他には、造形表現の観点から手作り楽器の実践を検証したものに、近藤・土屋(2010)がある。手作り楽器の実践に対し、保育者養成校の学生がどのような意識を持ったかを調査している。

このように、幼児を対象とした手作り楽器の実践に関心が高まっていることは窺えるが、「音楽表現」に特化した、「保育現場における実践」の研究はあまりないといえるのではないだろうか。

最後に、駒(2010)の研究を挙げたい。領域「表現」における創造的(ここでは探索的とほぼ同義である)な音楽活動に対する保育者の意識を質問紙によって調査したものである。その結果、多くの保育者が“木の葉や石など身近な素材を使って音遊びをしたい”“空き缶を叩いて音楽を作るなど、幼児の音遊びを日常の活動で取り上げたい”としているにもかかわらず、前述のような「身の回りの音素材を通した遊び活動」が創造的な活動と結び付けにくい現状があることを示している。また、このような活動を支える保育者の手立て不足についても言及している。

保育現場における手作り楽器の実践は、まだ萌芽についた状態であるとはいえ、実践例が少ないことも、保育者の手立て不足の要因の一つなのではないかと考える。

4. 研究の目的

本研究は、手づくり楽器の実践を通して、幼児の探索的活動の可能性を見出すこと、実践の有効性を検証するものである。幼児期における音に対するかかわり及び楽器とのかかわり方を考える保育実践に

示唆を与えられるものであると考える。

5. 研究の方法

子ども園の年長児2クラスを対象に、執筆者3名で手づくり楽器のワークショップを実践し、その様子を観察対象とした。研究協力に際しては、研究目的、参加の任意性、匿名性、データの取り扱い方法等を口頭及び文書で説明し、同意書によって了承を得た。

5-1. 実践の概要

対象：幼保連携型認定こども園千葉女子専門学校附属子ども園 年長児 2クラス (A, B)

A：20名 B：22名

期間：2019年9月(各クラス40分)

場所：こども園の各教室

5-2. 実践の趣旨と方法

本実践の構想は、鎌田が2018年より企画運営及び講師として活動している「音・音楽フォーラム松戸⁸⁾」主催の講座「手作り楽器で音遊びしよう!!」を基にしている。講座は小学生を対象に、これまで全2回実施している。鎌田は実践の対象を小学生としてきたが、本実践の対象は幼児であるため、対象の発達段階や教育要領の内容を加味し、黒宮を中心に幼児を対象とした活動として趣旨及び内容を再構築し、二見が1991年からリトミックの研究で取り組んでいる音楽表現の要素を加えた。実践の展開については資料5(12頁)を参照されたい。各分野からの趣旨及び方法は以下の通りである。

5-2-1. 手作り楽器の講座からの観点

鎌田は、前述の活動において、第1回(2018年)は前掲の谷中優氏を講師に迎え、蛇腹ホースの「ミラクルホース」で、どのようにしたら音がでるか工夫し、色々な音の出し方を発見してもらった。また、空き缶で「クイーカ」を作り、音の出し方を参加者に探ってもらったりした。身近なものから出

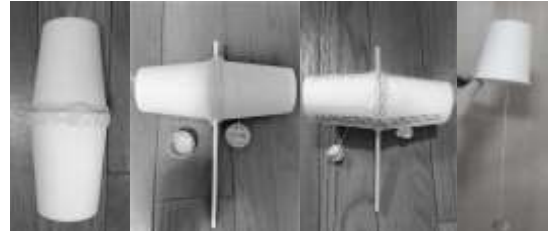
⁸⁾ 1991年に音楽環境を含む、音・音楽をテーマとする芸術・文化の普及と音楽教育の発展に寄与することを目的として創設され

た団体。

る、或いは出す音を探し、その音に気付き楽しむことをねらいとしている。第2回(2019年)の活動内容は前回とほぼ同じであるが、新たに「レインスティック」も作成した。「レインスティック」はラップの芯と爪楊枝で作成し、中に入れる物として、ポップコーンの種と岩塩を用意した。ここでのねらいは「音作り」であり、参加者は中に入れる物と量を工夫して自分の音を探し、好きな音をつくり出した。子どもの身近な環境から音を探すこと、気付くこと、楽しむという点が、本実践のねらいに共鳴する点である。

これまでの実践を踏まえ、本実践では紙コップを使ってつくることができる楽器を予め3つ示した。1つ目はマラカスである。紙コップ二つを合わせ、その中に入れるものには、ポップコーンの種・砂利・茶葉・爪楊枝(安全面から先端を切り落として細かく切ったもの)を用意した。入れるものの種類及び量を工夫することで自分の好きな音を探すことをねらいとした。2つ目は、でんでん太鼓である。こちら、紙コップ2つを合わせ、その間に割りばしを接着させる。そして、タコ糸で左右の紙コップにペットボトルの蓋又はアルミホイルを丸めたものをつけられるようにした。太鼓にぶつかる材料による音の違い、そして奏法による音の違い(回し方、速度等)で音の探索をすることをねらいとした。3つ目はクイーカである。鎌田の実践では空き缶を使っていたが、安全面の配慮及び材料の統一性の理由から、紙コップによるクイーカとした。ねらいは、鎌田の実践同様である。どの楽器も自分の好きな音、音の出し方を探求できるものであるが、それぞれ音の種類や音の出し方⁹(奏法)が異なるため、子どもが自身の興味に合わせて作りたいものを選択する上での指標になると考え提示した。またこれ以外のモノを作ることも可とした。

資料1: 左から、マラカス・でんでん太鼓(ペットボトルの蓋・アルミホイル)、クイーカ



5-2-2. 領域「表現」の観点から

幼稚園教育要領や幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、領域「表現」のリード文において、「自分なりに表現することや「創造性を豊かにする」ことが述べられている。駒(2016)は、具体的な活動方法が示されていないが故、活動の展開は各園または保育者の裁量に任されている現状があるとしており、志村(2016)は、この現状を「未だ混沌とした状況であることは否めない¹⁰」としている。領域「表現」の具体的な活動内容に関しては、喫緊の課題があるといえよう。乳児期において有意義であるとされた探索的な活動から、小学校に入り授業として「音楽」に出会うまでの幼児期において、子どもの発達を鑑みた意義深い活動とはどのようなものであるか。志村(2016)は前述に続けて、幼児期に身に付けたい姿勢として「幼児が自分自身でいきい音楽や歌を見つける力をもっていること、自分なりの方法で工夫しながら表現できること¹¹」を挙げている。このような理論を踏まえ、本実践は、楽器をつくり、音を探す過程において、自分の好きな音・好きな奏法に出会うため、探索的に音と向き合うことを趣旨としている。さらに全身の感覚を伴って音に向き合えるよう、身体の総合的な感覚をはたかせて音とかわりを持つことも含めている。

本実践においては、先ず導入において楽器の素材との出会いに対して身体の諸感覚をはたかせるようにした。音の素材を、特に視覚、嗅覚、触覚を通

⁹ 津田(2016)楽器を操作する肉体的動作をもとにした発音動作による7つ分類より参照、94頁。

¹⁰ 志村洋子(2016)「幼児期の『音楽教育』の本当の姿は」、『乳

幼児の音楽表現——赤ちゃんから始まる音環境の創造』、中央法規、105頁。

¹¹ 志村(2016)前掲、105頁。

して触れ合えるよう声をかけ、子どもが感じたことを共有した。さらに、紙コップにいずれかの材料を入れ、何が入っているかというクイズをおこなった。どの材料からどのような音が出るかを、イメージするためのはたらきかけである。このような導入を通し、子どもたちが自ら好きな音を見つけ、好きな楽器を作るために素材と子どもの出会いをデザインした。

資料2：においを感じる様子



5-2-3. リトミックの観点から

リトミック教育では、声・楽器などの音や音楽を聴き、それらの音のニュアンスやアーティキュレーションなどを感じ取りながら身体的に表現することにより、音楽表現能力を養うことを目的の一つとしている。

本実践において、子どもが楽器作りを通して音が出る仕組みに気づき、音の持つイメージを感じる、そして実際に音を出した結果思い通りの音を出せたのか、自分の思った音を出すために、楽器作りにおいて工夫すべき点は何か、といった問いを自発的に往還しながら、自分がイメージした音を出すために楽器や身体を如何にコントロールしながら表現することができるかを考えることを目的としている。さらに、音を五感で察知し模倣することで身体表現力が磨かれることも期待できると考える。

本実践では、活動の中盤、ほとんどの子どもが楽器をつくり終えた時間に、「楽しいときに笑ったイメージの音」と「悲しいときに泣いているイメージ

の音」と二つのイメージを与え、制作した楽器でそのイメージに合った音を出す課題を行った。

その後「楽器でお話ししよう」のゲームをおこなった。このゲームは、6~7人ほどのグループで、先の二つにイメージに加え「怒ったイメージの音」を合わせ三つのイメージを音で表現し伝達するものである。ゲームは3回行い、1回目は実践者が言語でイメージを与え子ども同士で伝達をする。ゲーム2, 3回目は、実践者が言語を使わず楽器の音でイメージを与え、子ども同士で伝達をするというものである。2回目と3回目は与えるイメージを変えている。

5-3. 観察の手順

観察の方法は、実践において執筆者全員が実践者として（以下、実践観察における執筆者は実践者とする。）参与観察をおこなった。観察中の記録は、固定ビデオカメラ3台、手持ちビデオ1台によるものである。また、実践後に保育者1名に対するインタビュー¹²をおこなった。

5-4. 分析の方法

記録の分析については、ELAN¹³による動画解析をおこなった。観察によって得られた動画記録を「実践者の発話（黒宮・鎌田・二見）」「実践者の動き（黒宮・鎌田・二見）」「子どもの発話」「子ども動き」の8項目の注釈層に分け、すべての項目に注釈を入れた。書き起こした記録から、子どもと音のかかりによって生まれる発話や動作の相互関係を検証した。検証は、執筆者全員で協議を重ねた。

6. 結果と考察

ここでは、楽器づくりのワークショップの流れに沿って、導入の様子、楽器作りの様子、音を出す場面の様子から考察をする。子どもの発話に関しては、平仮名またはカタカナで記し、動画の記録より聴取したものをそのまま文字にしている。また、発

¹² 本実践における倫理配慮を文書及び口頭で説明し同意書を得た上で、実践同日、実践終了後に20分間子ども園内で実施した。非構造化インタビューで黒宮がおこない、記録はインタビューノートに記し、インタビューデータを基に執筆者全員で省察したものを音声録音した。

¹³ 正式な名称は「EUDICO Linguistic Annotator」。もともとは言語学者のためにマックス・プランク心理言語学研究所で開発された。映像や音声に注釈をつけ整理することができるフリーソフトである。<https://tla.mpi.nl/tools/tla-tools/elan/>

話については「」で示し、音楽活動にかかわる音、奏法、イメージ等の事項については《》で示す。

6-1. 導入の様子

まず導入部分について、子どもたちはそれぞれの材料を既に経験している状態であり、「ポップコーンはどんなにおいがする?」という実践者の問いに対して「どうもろこしー」と原材料を理解している回答や、「爪楊枝はさわるとどんな感じ?」という問いには、「は(歯)にささる」などといった、生活の中の経験が現れている回答も見られた。すべての材料について「触ってみて」「においを嗅いでみて」と声かけをして進めたが、進めるうちに声かけをしなくても、子どもが自発的に「においしない」「(触ってみて) きもちいい」という発言が見られた。子どもたちが、総合的な感覚をはたらかせて、材料とかかわりを持つようとしていることが読み取れる。でんでん太鼓の打つ部分の素材を変え、音の違いを感じ取る際には、「こっち(ペットボトルの蓋)のほうはおとがあつく(厚く)て、こっち(アルミホイル)のほうはおとがうすい(薄い)」と発言した女児がおり、音に対する感覚を研ぎ澄ましている様子、さらにそのことを自分なりの言葉で表現している姿が見られた。クイーカにおいては、ほぼ全員が初めて出会う楽器であった。「どうやって音を出すと思いますか」と問いかけ、その後実践者が音を出した。子どもたちは、音を聞いた瞬間に、子ども同士で顔を見合わせ、そのまま後ろにいる大人を見るという行為が確認された。初めて聞く音、さらに想像していなかった音の出し方に驚き、その驚きを子ども同士、周りの大人と共有したいという現れであろう。

6-2. 楽器作りの様子

6-2-1. 選択楽器の統計から見る考察

各クラスによる選択楽器の人数の分布を男女ごとにまとめ、比率を出した。(表1参照)

両クラスともに、男女合わせて約半数(57%)がマラカスを選択している。マラカスは、多くの子どもにも認知されている様子で、家庭で作ったことがあ

るという発話も聞かれた。約半数の子どもが選んだ理由は特定できないが、子ども自身が出来上がりの形を予想できるため安心して活動できると考えたということもいえるだろう。また、女児のみの割合を見ると、72%(A:85%, B:58%)がマラカスを選んでいる。男女の楽器選択に関する傾向は興味深いですが、今後の研究にしたいと考える。B組は、クイーカの選択数がでんでん太鼓の倍の数字となっているが、その理由や要因も今回だけの結果でわからない。ただ、B組ではクイーカの試奏を担当の保育者がおこなっており、女児の一人から「せんせいとおなじのをつくりたい」という発話が見れていた。信頼する担任の保育者が演奏したものと同じものを作りたいという心理的側面も影響しているのではないだろうか。B組は選択した楽器の違いに、A組ほど男女の割合の差がない。

表1: 各クラスにおける楽器選択の内訳《単位: 人数(比率*)》
※比率: 各クラスの男女の小計①に対する各楽器の比率

A組: 20名(男児7名、女児13名)

	マラカス	でんでん太鼓	クイーカ	作らない	小計①
男児	1 (14%)	2 (29%)	3 (43%)	1 (14%)	7
女児	11 (85%)	2 (15%)	0 (0%)	0 (0%)	13
小計②	12 (60%)	4 (20%)	3 (15%)	1 (5%)	20

B組: 22名(男児10名、女児12名)

	マラカス	でんでん太鼓	クイーカ	作らない	小計①
男児	5 (50%)	1 (10%)	4 (40%)	0 (0%)	10
女児	7 (58%)	2 (17%)	3 (25%)	0 (0%)	12
小計②	12 (55%)	3 (14%)	7 (32%)	0 (0%)	22

2クラス(A,B)合計: 42名(男児17名、女児25名)

	マラカス	でんでん太鼓	クイーカ	作らない	小計①
男児	6 (35%)	3 (18%)	7 (41%)	1 (6%)	17
女児	18 (72%)	4 (16%)	3 (12%)	0 (0%)	25
小計②	24 (57%)	7 (17%)	10 (24%)	1 (2%)	42

6-2-2. つくる活動の様子からの考察

楽器をつくる活動において、選択した楽器によって子どもの音への向き合い方に違いが見れていた。

マラカスは、紙コップの中に様々な材料を入れながら振って音を出し、材料の種類や量を自分好みに合わせて変え、中に入れる物と出てくる音との関わりに集中する子どもが見られた。しかし、完成に時間を要さないため、特に女児の多くは、仕上がった

後の模様や飾りに強く意識が向き、用意していたビニールテープを切って紙コップの側面に貼るという行動が見られた。音の表現を探索することよりも、造形表現に関心が向いている様子が窺える。一方で、マラカスを作った男児に、探索した結果の《音》を楽しんでいると考えられる行動がみられた。マラカスを振って音を出すのではなく、胸の前に抱え込み、マラカス自体は動かさず、ぴょんぴょんとその場で跳ねたり、跳ねながら前進したりして、動きの違いによって聞こえるマラカスの音を楽しんでいた。音を身体と一体化させ、子ども自身が自ら出した音を身体感覚と共に楽しむ姿は、好きな音・奏法を探索している過程でもあるといえるのではないだろうか。

前述のマラカスの様子から比較すると、でんでん太鼓やクイーカを選んだ子どもは《音》に興味を持ち活動しているように感じられた。特にクイーカは、子どもに選んだ理由を尋ねた際、「いままで知らないおとだったから」と答えていた。5歳児にとってこれまでの生活の中で経験したことのない音に冒険心を持ち興味をもったとみられる。また、クイーカを選んだ理由として、音の出し方に興味を持った子どもは、音の高低や質等の音そのものより、音がどのようにして出るのかという科学的な撥弦原理に興味を持っているのではないかと考えられる。

資料3：楽器作りの様子



6-3. 音を出す場面の様子

先ず楽器ごとに表出された特徴から、全体で音を出す様子の考察を述べたい。マラカスを持っている子どもは《笑っているイメージの音》の指示において、激しく速く振る、楽器を振りながら自らもぴょんぴょん飛び跳ねるといった動作が見られた。でん

でん太鼓を持っている子どもは、速く楽器を回す、激しく左右に振るといった動作が多く見られた。クイーカを持っている子どもは、タコ糸を細かくこする、クイーカを振るといった動作であった。クイーカを振るだけでは音は鳴らないが、《笑う》というイメージから身体を動かしたと思われる。これらのことから、子どもは《楽しいときに笑ったイメージ》では速いテンポや激しい動きによって表現することが分かる。《悲しいときに泣いているイメージの音》の指示については、マラカスを持っている子どもはゆっくり小さい動きで振り、でんでん太鼓を持った子どもは楽器を動かさず身体の動きも止まっていた子どもも見受けられた。クイーカを持った子どもは、ゆっくりタコ糸をこするか、または何もしていない子どももいた。これらのことから、子どもは《悲しいときに泣いているイメージの音》ではゆっくり音を出す、または音を出さない、身体も動かさないという表現をする傾向にあるといえる。

次に、子ども全体の表情や動作についてである。《笑っている音》を表現しているときの子どもの表情は主に笑顔であり、《泣いている音》は主に無表情または悲しそうな表情が見られた。これは、子どもが対照的な心情を表現しようとするとき、音で表そうとする中にも、相手に伝えるツールとして自然と表情を伴うことがいえる。

最後に、ゲーム時の考察である。ゲームにおいては、活動を通して実践者がイメージを与える際に分かりやすく表情も多少加えているが、ここでの本来の目的はクイズを正解させることではなくイメージに合った表現ができるかどうかであるため差し支えないと考える。1回目は音の伝達が少々慎重に進行していたが、2回目になるとスムーズになり、一周回る速度が速くなった。3回目は、全体の活動では触れなかった《怒ったイメージ》を与えているが、子どもたちは最後まで迷わずイメージの音を伝えることができた。活動中、ゲームの意図が伝わらない子どももいたが、子ども同士で協力して教え合う場面も見られた。ここでも、子どもたちは楽器の音の

出し方・顔の表情・身体表現を工夫して次の人にイメージを伝えていた。これらのことから、幼児は音を通して表現しようとするとき、さらに他者に伝えようとするときには、楽器の音だけではなく身体の動きや表情も使って、全身で表現するということがいえる。

資料4：音を出す活動の様子



7. 事例と考察

7-1. クイーカの音の出し方を発見したBくん

事例1

Bくんは、楽器づくり開始の合図と同時に紙コップを一つ手に取り、実践者の「何つくるか決めた？」という問いかけに「きめたー」と答える。楽器の制作は実践者の補助を受けながら作り、紐は長め（約40センチ）を希望した。楽器をつくり終わるとすぐに、ビデオ撮影者¹⁴（以下、撮影者）にクイーカを見せに行く。撮影者から「できた？キュッキュッってやってみて」と言われ、指でこすって音を出し、次いで他の女兒にもクイーカを見せ、指でこすって鳴らした音を聞かせている。その後、実践者のところへクイーカを見せに行き、実践者の耳元で、指でこすり音を鳴らしている。実践者は「おー聞こえる、聞こえる」と言い、「これでやっごらん」と濡れティッシュを渡す。Bくんは制作をしていた場所に戻り、渡された濡れティッシュで一回こすってみる。Bくんはこすりながら顔を左側にひねり、右耳を紐の近くにして音を聞いている様子である。音を聞いて約1秒間口を開けたまま静止した後、声は出していないが口の中で「あー」と言い、正面を向いて笑顔になる。もう一度、今度は少

しゆっくり濡れティッシュで音を出し、実践者の方を見つめ頷き、「見て！」という様子で実践者の前にクイーカの楽器本体を差し出している。さらに濡れティッシュで上から下へ約3.3秒間かけ、こする幅を大きくして鳴らし、最後は楽器を高く上げて静止した。鳴らし終わると濡れティッシュを約1.8秒間見つめ、実践者に視線を送った後、撮影者に笑顔を見せている。その後高く持ち上げている紙コップを下から見上げるようにのぞき込み、再び撮影者に視線を送っている。撮影者がBくんの近くに行くと、Bくんはクイーカを、「初めはゆっくりこすり、最後は速くこする」「速くこする」など色々な奏法を撮影者に見せ、最後には濡れティッシュを高く上げていた。

その1分後、再び撮影者の前に現れたBくんは、クイーカの紐を腕に沿わせて音を出していた。その際、こすっている途中で濡れティッシュが手から落ちてしまったが、Bくんは拾うことなく指で紐を最後までこすった。撮影者が「おっ、指でもできるんだね」と言うと、Bくんは濡れティッシュを脇に挟み、指で鳴らしてみる。さらに脇に挟んだ濡れティッシュで指を濡らし、紙コップに近い紐の上方部分で、指で紐を抑える圧やこすり方を変えながら3回こすり、口の中で何かを言いながら撮影者の方に顔を向けている。再び濡れティッシュで指を濡らし、ゆっくりこすり始めるが、途中で撮影者と視線を合わせた後速くこすり、「できたー」と言って別の場所へ移動していった。

Bくんは、初めからクイーカをつくりたいという気持ちを持っている様子で、楽器ができあがり、指で音を鳴らすことができた段階で、満足している様子である。指で鳴らした音を撮影者や他児、実践者に聞かせに行っていることからその様子が窺える。その後、実践者に勧められた濡れティッシュを使って音を鳴らした際、それまで正面を向いてこすっていたBくんは、その時は音を出しながら顔をひねり、耳を近づけている様子がある。これはこれま

¹⁴ Bくんと面識のある人物である。

でと違う音に身体が反応し、自然と聴覚を研ぎ澄ましている様子であるといえるのではないだろうか。そして、その後の静止、口の中で「あー」と言っていること、正面を向いての笑顔は、Bくんが濡れティッシュを使って出した音に驚き新しい感覚に感激し、満足している様子であると考えられる。その感動を周りの人と共有したいという思いが、実践者に楽器を差し出していることや撮影者に笑顔を見せていることに現れている。さらに楽器を鳴らした後に、楽器を高く上げたり、濡れティッシュを見つめたり、楽器を下から見上げるように眺めている姿からは、楽器の鳴らすモノと鳴らされるモノの関係に気づき、音の出る構造を意識し始めている様子と捉えることができるのではないだろうか。満足のいく音が出た後、Bくんは紐をこする速度を変化させるなど、奏法の工夫に意識を向けている。

そして、後半の撮影者とのやりとりは、偶然濡れティッシュが落ちるというアクシデントから始まったものであるが、撮影者の言葉をきっかけに指でいい音を鳴らそうとするBくんの探索の姿が現れている。こするものが濡れていると好きな音が鳴る、ということがわかったBくんは、指を濡らすことを考え、奏法や身体の使い方を工夫し探索した結果、「できた」と実感できる奏法にたどりついている。

Bくんの事例からは、子どもの中での達成感が、実践者や撮影者のさりげない支援により、さらに新たな達成感に書き換えられていっているということが読み取れると考える。そして、子ども自分自身が想像もしていなかった満足に出会うことは、大きな喜びや感動に繋がるのではないだろうか。

7-2. でんでん太鼓の紐を切ったCくん

事例2

でんでん太鼓をつくりたいと希望したCくんは、実践者の助言を受けながら通常の形のでんでん太鼓（左右の両方に紐がついているもの）をつくった。制作中Cくんは、ほとんど実践者の手を借りずに、自ら紙コップを合わせたり、セロハンテープを張ったりなどしていた。音の出る部分の素材にはアルミ

ホイルを選択している。でんでん太鼓ができあがると、Cくんは先ず、割りばしを右手に持ちくると回転させて音を出し始めた。7回（1.8秒）音を鳴らして、実践者に話しかけている（ビデオでCくんの発話を聞き取ることはできなかった）。その後、再び右手で回しながら鳴らしているが、すぐに止め、片側の紐を触りながら楽器全体を眺めている。今度はゆっくり回して音を鳴らすが、また止めて同じ片側のアルミホイル部分を触りながら、実践者に話しかけ、楽器を見せている。会話を終えると、アルミホイルの当たり具合を確認するような様子でゆっくり回転させる。再び気になる紐の部分を実践者に見せながら話しかけると、実践者はCくんの発話に対して「もっと短くする？」と答えている。会話を終えると、Cくんは再び片側のアルミホイルを触り、その後《速く回す》《ゆっくり回す》の方法で楽器を鳴らす。その後、両手を使って速く回し、約5.8秒間音を鳴らしている。さらに両手で速度を変えながら約7秒間音を鳴らした。その後再度実践者に話しかけるが、実践者は他児のクイーカ制作の補助をしながら会話をしており、Cくんは実践者がクイーカの紐の長さを調整するためにハサミを使っている様子を見ている。その後Cくんは、自分自身のハサミを手に取り、気になっていた片側の紐を切る。Cくんは、紐が一本になったでんでん太鼓を両手でやや速めに約2.4秒間鳴らし、楽器全体を眺めて実践者に話しかけている。そして先ほどよりも速く回転させながら約5.5秒間楽器を鳴らし、実践者と目を合わせている。その後、楽器を下向きにして右手でゆっくり回転させたり、横向きにして振ってみたりし、再び本来の向きに戻し、両手でやや速く回転させている。続けてこれまでで一番速く回し、その際初めて笑顔が現れている。その後、Cくんは制作をしていた机から移動し、非常に速く回し鳴らしているのを他児に見せたり、ジャンプしたりしている。

Cくんは楽器が完成したのち、片側の紐の回り具合及び当たる音が気になる様子で、《楽器を鳴ら

す》《片側のアルミホイールや紐を触る》という行動をくり返している。Cくんが音・モノを通して、探索している場面であると考え。約1分30秒間、速度を変えて鳴らしたり、楽器を触ったり、実践者に話しかけたりして探求し続け、Cくんは片側の紐をハサミで切ることを選択する。その選択には、直前に実践者がクイーカの紐の調節をするためにハサミを使っている行動を見たことも、要因の一つなのではないかと考えられる。Cくんは紐が一本のみになったでんでん太鼓を回し、実践者に視線を送っている。これは満足 of いくものができたことを共有したいということが現れているのではないだろうか。満足 of いくものができたということは、Cくんが笑顔で楽器を鳴らしていることからいえる。また、他者と共有したいという思いは、その後Cくんは場所を移動し、他児に見せていることから窺える。また、Cくんはでんでん太鼓の紐を一本にした後、下向きで回す、横向きにして振るなど、新たな奏法を探索しようとしている。Cくんの中の課題を一つ解決したことで、次のステップの探索を始めている姿と捉えることができるのではないだろうか。

最後に持ち方について、Cくんは、初め右手で楽器を回し鳴らしていたが、途中から両手も持ち方に変えている。そして、両手で持ち替えた直後は音を鳴らす時間が長くなっており、またその後も下の向きで鳴してみようとした場面以外は全て両手で持つことを継続していることから、Cくんはでんでん太鼓を両手で持って鳴らすこと、またそこから出た音を心地よいと感じているといえる。

Cくんの事例からは、子どもがよりよい音、よりよい動きを探索することを通し、自分の「好き」な感覚を探索している様子が現れていると考える。さらに探索活動の中で、奏法を工夫するなどの新たな視点に意識が向いていることも窺える。また、でんでん太鼓の持ち方や演奏の向きについて、正しい奏法について何も言及していないが、Cくんは探索の中で心地よい奏法を選択し、それは自然と正しい奏法になっている。本来楽器の持ち方や姿勢などは、

その楽器を鳴らすのにふさわしい姿勢がとられているはずである。探索の過程を通して、Cくんが自らそのことを習得したといえるのではないだろうか。

8. まとめ

本研究は、幼児の探索的な活動の可能性及びその実践の有効性を見てきた。手作り楽器の実践、特に二つの事例からは、子どもが既にもっていた「好き」の枠組みを探索によって飛び越え、新たな「好き」に出会う喜びを感じている姿が見られ、一方ではより心地よいものを探求することを通し、「好き」に出会う姿があった。このような探索は一時的なものではなく、連鎖的に広がりを見せるものであると考え。探索的な活動は幼児のあらゆる音楽的な可能性を引き出すことができるのではないだろうか。

また教材性の観点から、楽器の性質と子どもの発達にはよりよい関わり方があると考えられる。5歳児にとって、マラカスは親しみのある楽器であり、多くの子どもが選択していた。素材を選び、振り方を工夫するなどの音探しや表現を楽しんでいる姿が見られたが、探索の連続性、持続性には課題があった。一方で、クイーカやでんでん太鼓のように、初めて出会う楽器、または撥弦原理を認知していない楽器については、子どもが固定概念に捕らわれず、全身の感覚を用いて創意工夫する姿が見られ、次から次へ新しい発見をする子どもの姿が捉えられた。このことは保育現場における幼児の発達と楽器のかかわりの関係性を考える上で、重要な視点ではないだろうか。幼児の発達段階において探索にふさわしい楽器があり、発達段階と楽器及び音のかかわりを配慮することは改めて重要であると考え。

音出しの活動の様子からは、子どもが手作り楽器を用いて全身の動きや表情を伴って表現しようとする姿が見られた。これは、子どもの表現に対する特徴であると同時に、手作り楽器という自分自身のつくった楽器、愛着のある楽器であるからこそ全身の表現を伴うことができたともいえよう。

保育現場における音楽表現の観点からの手作り楽器の実践は、これまであまり多く見られなかったが、本実践ではつくる過程で音の出るしくみを探索的に理解し、つくった楽器から出る音に対して創意工夫して向き合う子どもの姿を捉えることができたと考える。「音」に注目した手作り楽器の実践は、子どもの主体的な音楽表現を育む可能性を持った一実践といえるのではないだろうか。

9. 本実践の課題と今後の展望

保育における表現活動は、子どもの日常とともにおこなわれるため、年間を通した日常の保育の中で構築されることが重要であると考えられる。本実践は一回のみの実践であるため、活動の継続性には課題がある。また一回という時間の制約があったため、内容が過多になってしまった印象もある。「楽器作りの導入」「楽器制作」「音出しの表現」のそれぞれに時間をかけて丁寧に実践し、楽器制作における意欲の向上及び創意工夫、音の出し方やイメージに対する表現方法の思考などについて、子ども一人一人を細かく観察していく必要があると考える。

また、実践後の保育者へのインタビューにおいては、本実践により音楽表現活動の新たな示唆を得ることができたという意見が聞かれた。本実践ではマラカスの材料等を実践者が用意したが、素材すなわち音の出るものを探るところから日常の保育の中でおこなうことができるだろう。また、こども園でおこなっている植物の栽培時にも、育てた後に種で楽器をつくる活動等が念頭にあれば、植物を育てることの面白さにもつながるのではないかという、保育の総合的な視点からの意見もあった。子どもの日常及び季節、行事等、子どもが生活する環境と共によりよい実践を目指していきたい。

10. おわりに

手作り楽器の実践において、子どもは楽器をつくること及びその楽器の音を出すことを通して、自分の好きな音、好きな奏法を探索していた。また音と

奏法を往還しながら、子どもの探索は、既に子どもの中にある枠組みを飛び越えて広がりを見せていた。これは、子どもが音と奏法をコントロールするための身体感覚を往還しながら主体的に音と楽器にかかわっている姿であるといえよう。このような力は、あらゆる音楽活動の土台になるものであると考える。

子どもが音や楽器に対して持つ可能性を育むために、保育者や周りの大人は教示的に働きかけるのではなく、子どもが持つイメージ、鳴らしている音を享受しながら、さらなる探索の一步を踏み出せる環境構成、かかわりを十分考慮することが大切であるだろう。

謝辞

本研究にあたり、実践にご協力いただきました千葉女子専門学校附属聖こども園のお子様及び保護者の皆様、教職員の皆様に心より感謝申し上げます。

参考文献・引用文献

- Adolph, K. E., & Kretch, K. S. (2015). "Gibson's Theory of Perceptual Learning." *In International Encyclopedia of the Social and Behavioral Sciences* (2nd ed, Vol. 10). ed. H. Keller (Developmental Section Ed.) New York: pp. 127-134.
- 伊原小百合「幼児期における探索的経験の意義 —楽器とかかわる幼児の縦断的観察—」、『東京藝術大学博士論文』、2018年。
- 今川恭子「表現を育む保育環境 —音を介した表現の芽生えの地図—」、『保育学研究』第44巻第2号、2006年、60～70頁。
- 石川眞佐江・村上康子「2歳児の楽器遊びにおけるモノとのかかわりの特徴 —楽器へのアプローチの違いに着目して—」、『音楽教育実践ジャーナル』第15巻、2017年、104～113頁。
- ギブソン、ジェイムズ・J. 『生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る—』古崎敬他訳、1985年、サイエンス社。
- 駒久美子「幼稚園における創造的な音楽活動に対する保育者の意識 —保育者を対象とした質問紙調査の分析を通して—」、『音楽教育研究ジャーナル』第33号、2010年、1～14頁。
- 近藤信子・土屋由美子「造形表現に関する学生の意識 —保育所実習・手作り楽器への取り組みを通して—」、『中国学園大学

紀要』第9号、2010年、119~124頁。

谷中優「手作り楽器によるアンサンブル活動の研究 —創造性を育む音楽教育について—」、『音楽教育メディア研究』第4巻、2018年、45~59頁。

谷中優「星野圭朗の理論と実践についての考察」、『千葉敬愛短期大学紀要』第36号、2014年、57~73頁。

津田奈保子「幼児期における楽器の探索活動について」、『大阪芸術大学短期大学部紀要』第40号、2016年、89~100頁。

津田奈保子「幼児の音聴取の発達変化 —ある保育所での手作りマラカス活動の工夫を通して—」、『藝術文化研究』第23号、2019年、57~72頁。

長崎結美・馬場拓也「幼児・児童を対象とする音楽と造形を融合した総合的な表現活動に関する研究 —『木育』を取り入れた楽器づくりと演奏実践を通して—」、『帯広大谷短期大学地域連携推進センター紀要』第4号、2017年、53~62頁。

日本赤ちゃん学会『乳幼児の音楽表現 —赤ちゃんから始まる音環境の創造』、小西行郎・志村洋子・今川恭子・坂井康子編著、東京：中央法規、2016年。

細間宏通・菊地浩平編『ELAN 入門 —言語学・行動学からメディア研究まで』、東京：ひつじ書房、2019年。

丸山慎「楽器への旅路、あるいは音への誘い —乳幼児期の音楽的発達とアフォーダンスの学習」、『音楽教育実践ジャーナル』第15巻、2017年、114~124頁。

三嶋博之・丸山慎「生態学的学び—知覚と行為の相補的発展」、佐伯胖監修『学びの認知科学辞典』、大修館書店、2010年、423~441頁。

無藤隆監修『新訂 事例で学ぶ保育内容〈領域〉表現』、東京：萌文書林、2018年。

文部科学省『幼稚園教育要領解説』、東京：フレーベル社、平成30年3月。

資料5：手作り楽器WSの展開

時間	●幼児の活動	○教師（講師）の援助・◎留意点	★環境構成
10:00 (10:45*) (*2グループ目)	●導入 ・机の前に座る。 ・話を聞く。 ・素材に触れる。 ・どんな音が鳴っているのか聴く。 ・中にどのような素材が入っているかを考える。 ・どうやって音が出るのかを考える。	○一人一人の顔を見ながら、親しみを持てるような自己紹介をする。 ◎初めて会う子どもたちと「一緒に楽しくやろう！」という思いを込め、子どもと同じ目線に立てるようなエピソードを入れて話を進める。 ○楽器（主にマラカス）を作るための素材（種、米、木の枝、葉）に触れ、色や形、さわり心地、におい、味（「食べたらどんな味がしそう？」）に対する声かけをし、総合的に感覚をはたらかせながら、楽器作りへ関心を促す。 ○上記素材を入れた紙コップのマラカスを鳴らし、「何が入っていると思う？」「どんな音がする？」とクイズ形式で進め、教師も楽しみながら、楽器の中身（音の素材）に対する興味を引き出す。 ◎鳴らす順番は、例①種②葉つば③砂利+葉つばのように、単純なものから発展させる。 ○「手作り楽器は世界でも作られているんだよ」「小学校になっても段ボールで太鼓を作るよ」などの話をし、「どんなものでも楽器になる」と、手作り楽器に対する認識を広げる。 ○クイーカーとでんでん太鼓を出し クイーカー：「これはどうやって音が出ると思う？」と投げかける。 でんでん太鼓：アルミホイールとキャップの音の違いを演奏する。 ◎発音のしくみを自分なりに考えたり、素材によって様々な音が出せることを再確認することで、楽器作りへの意欲をさらに高められるようにする。	★3カ所に分かれて楽器を作る。各机の上に必要な材料を揃えておく。（*椅子、材料の配置は他2つの机も同様）  【材料】 （本体） 紙コップ （マラカスの中身） 植物の種、米、木の枝（爪楊枝を細かくしたもの）、葉つば （その他部品） タコ糸、ビニールテープ、ウェットティッシュ、アルミホイール、ペットボトルのキャップ、はさみ、ホチキス ◎安全面から、爪楊枝の鋭利な部分は取り除いておく。
10:10 (10:55)	●楽器を作る ・素材による音の違いや面白さを感じる。 ・自分の好きな音を探す。 ・作った楽器で、どんな音が出るのかを試す。 ・イメージを持ちながら、様々な鳴らし方を探索する。 ・イメージを音で伝える。	○これから好きな音を探して、好きな楽器を作ることを伝える。 ○一人一人の思いを受け止め、イメージを引き出しながら素材や奏法の提案をする。 ◎机にある材料で、自分の好きな楽器、好きな音を作るよう促す。 ○楽器が出来上がってきて、音を出し始めたら、「みんなで音を出してみよう」と音を出すことを促す。 ○（楽しいとき・笑っているとき）（悲しいとき・泣いているとき）の二つのイメージを与え「どんな音がするかな？」と声をかけ、音とイメージが関連するよう促す。 ○「みんなで（楽しいときの音）（悲しいときの音）を楽器で鳴らしてみよう」と声をかける。 ◎子どもたちの音や音楽に対するイメージを認めながら、作った楽器の音に耳を澄まし、思い描く奏法を引き出せるよう援助する。 ○講師が（楽しいときの音）（悲しいときの音）等をイメージして音を出し、その音のイメージを隣の人に音で伝えていくことを説明する。 ◎上記のイメージに限定せず、子どもたちのイメージから好きな表情を設定にする。 ◎子どもたちの持つイメージから、「こんな風に鳴らしたらどんな気持ちに聞こえる？（講師が鳴らしてみる）」と他の視点からのアプローチをおこない、子どものイメージや奏法を豊かにできるよう援助する。 ◎グループの中で目立たない子どもの音を拾い上げたり、グループ内で音の比較（こっちとこっちは音がちょっと違うけど、何が入っているのかな）等の援助をし、グループの中で表現が活性化するように配慮する。	★講師が、各グループに一人ずつつきながら活動を見守り、音の探求を楽しめるよう援助する。 ★各講師が、音を引き出す言葉掛けに対する共通理解をし、自由な発想で子どもたちのイメージを音で表現できるように援助する。
10:30 (11:15)		○「作った楽器で明日は歌に合わせて鳴らしてみよう」や「今日ではできなかったけれど、作った楽器の音に合うに絵を描いたりしてみよう」と提案する。	